

# 万葉論

## 1章 第一巻

### 九州天皇家終焉への鎮魂歌

## 持統の近畿天皇家の代の歌

### 持統奈良即位

持統4年(690年)、正月即位。23日、幣を畿内の天神祇に班したまふ。(日本書紀)

持統は、690年正月に即位した。この即位は奈良である。九州天皇家、天武の皇后だった持統は、奈良に戻り、即位した。ここに近畿天皇家というべき王朝が始まる。即位以降の持統紀の主な記事を列挙しよう。

690年(持統4年)	正月即位。23日、幣を畿内の天神祇に班したまふ。 3月20日、(藤原)京と畿内との人の、年80より以上なる者に、(彦島嶋宮の稻)、人ごとに二十束賜ふ。 7月5日、皇子高市を以て、太政大臣とす。 6日、太宰・國司、皆遷任けたまふ。 10月29日、高市皇子、(藤原京の中の)藤原の宮の建造予定地を見学する。 12月19日、持統、藤原の宮の造営地を見学。
691年(持統5年)	10月27日、新益京(平城京)の地鎮祭を行なわす。
692年(持統6年)	1月12日、持統、新益京(平城京)の大路を見学す。 3月6日、伊勢神宮(三重県伊勢市)へ行幸 5月23日、浄廣肆難波王等を遣して藤原宮の地鎮祭を行う。 11月11日、新羅の朴憶徳を難波館(大阪難波)に饗禄たまふ。
693年(持統7年)	5月15日、無遮大會を内裏(藤原京内裏)に設く。 8月1日、藤原の宮地に幸す。
694年(持統8年)	4月5日、浄大肆を以て、筑紫太宰率河内王に贈ふ。 5月6日、公卿大夫に内裏(藤原京内裏)に饗たまふ。 12月6日、藤原宮に遷居
697年(持統10年)	7月10日、高市皇子没。
698年(持統11年)	軽皇子即位(文武天皇)。
701年(大宝1)	大宝律令制定
702年(大宝2)	持統崩御(58歳)

( )内は筆者註

### 「藤原宮」と「新益京」二つの地鎮祭

690年(持統4)即位・12月19日・・・藤原の宮の造営地見学

691年(持統5年)10月27日・・・新益京の地鎮祭を行う

692年(持統6年)1月12日・・・新益京の大路見学

692年(持統6年)5月23日・・・浄廣肆難波王等を遣して藤原宮の地鎮祭を行う

693年（持統7年）8月1日・・・藤原宮が完成

694年（持統8年）12月6日・・・藤原宮に遷居

これらの記事には二つの地鎮祭の記録が混在している。区別しなければならない。

691年10月は新益京の地鎮祭

692年5月は藤原宮の地鎮祭

## 新益京の地鎮祭

691年に行った地鎮祭は、新益京の地鎮祭である。新益京とは、その名前が語るように、「京」である。691年に地鎮祭を行って、その直後から土木工事に着手したと思われる。持統は、翌年に大路の視察に出かけている。京の街の基本が作られたということであろう。京を造るには多くの課題が存在する。宮を造るのとはわけがちがう。完成までには長い年月を要するのは当然である。持統の存命中にはこの京は完成しなかった。持統紀にその完成の記事、記録はない。その完成までには二十年近く要し、元明の代にやっと完成した。この新益京が、710年遷都の平城京である。平城遷都には元明天皇の歌がある。

和銅三年庚戌春二月、藤原宮より寧樂宮に遷りましし時、御輿を長屋の原に停めてはるかに古郷を望みて作る歌 78 一書に云はく 太上天皇の御製といへり

飛ぶ鳥の 明日香の里を 置きて去なば 君があたりは 見えずかもあらむ

## 藤原宮の地鎮祭

692年の地鎮祭は藤原宮の地鎮祭である。690年に即位した持統は自分の宮の造営にとりかかった。歴代の天皇は即位すると、それぞれ自分の宮を造営している。持統も同じく、自分の宮を作った。それが藤原宮である。宮の工事は、692年の地鎮祭の直後から始まったと考えて、完成まで約一年五ヶ月である。藤原宮とは持統の個人の宮である。その造営に要した年月が一年五ヶ月であったというのは、妥当な期間である。これは持統の宮の造営記録で、持統は奈良明日香に遺跡が残る藤原京を造営したのではない。

藤原京は「大極殿」「朝堂院」の偉容を誇る条坊都市であった。900m四方の「宮域」を中心に、東西2120m、南北3186mと想定される京である。（「藤原宮と京」 奈良文化財研究所）

藤原京大極殿だけを取り上げても、間口45m、奥行21m、高さ25mで、当時、日本最大の建物だった。この輝ける大藤原京をわずか一年五ヶ月で完成させることはできない。

持統と藤原京とは全く関係がない。持統が造ったのは自身の宮である。宮の造営地は藤原京の区域内だった。そして、持統宮は693年に完成し、その翌年に遷居した。では、藤原宮が新築されるまで持統はどこに居たのか。其れを示しているのが51番歌であろう。持統が居たのは明日香宮だった。持統は太宰府から奈良に戻ってきて藤原宮が完成するまで明日香宮に居たのである。

明日香宮より藤原宮に遷居りし後、志貴皇子の御作歌

51 采女の袖 吹きかえす 明日香風 都を遠み いたづらに吹く

今まで王朝の采女の袖を吹きかえしていた明日香の風だが、持統天皇が藤原の宮に移り、采女たちも遠くに行ってしまった。風は袖を吹きかえすこともなく、ただいたづらに吹いているだけのことだ。

53 藤原の 大宮仕へ 生れ付くや 娘子がともは 羨しきろかも

## 藤原宮の歌

690年（持統4）に即位した持統は、直ちに宮の造営にとりかかった。10月29日に高市皇子に藤原宮の造営地を視察させている。そして、12月19日には、持統自ら、藤原の宮造営地の視察に向かっている。この宮を作った役民の歌が50番歌である。

### 藤原宮の役民の作る歌

50 やすみしし わが大王 嵩照らす 日の皇子 荒栲の 藤原がうへに 食す国を 見し  
給はむと 都宮は 嵩知らさむと 神ながら 思ほすなべに 天地も 寄りてあれこそ  
石走る 淡海の国の 衣手の 田上山の 真木さく 檜の嬬手を もののふの 八十字  
治川に 玉藻なす 浮かべ流せれ 其を取ると さわく御民も 家忘れ 身もたな知ら  
ず 鴨じもの 木に浮きいて わが作る 日の御門に 知らぬ国 寄し巨瀬道より わ  
が国は 常世にならむ 圖負へる 神しき亀も 新代と 泉の河に 持ち越せる 真木  
の嬬手を 百足らず 筏に作り 浜すらむ 勤はく見れば 神ながらならし

50番歌は藤原宮を詠ったものである。藤原京ではない。藤原京と藤原宮とは厳密に区別されなければならない。もう一つ、藤原宮の井戸を詠った歌がある。

## 持統藤原宮の御井の歌

### 藤原宮の御井の歌

52 やすみしし わご大王 嵩照らす 日の皇子 荒栲の 藤井が原に 大御門 始め給へて  
埴安 の堤の上に あり立たし 見し給へば 日本の 貴香具山は 日の経の 大御門に  
春山と 茂さび立てり 畝火の この瑞山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山さびいま  
す 耳成の 貴管山は 背面の大御門に 宣しなべ 神さび立てり 名くはし 吉野の  
山は 影面の 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける 嵩知るや 天の御蔭 天知るや 日  
の御蔭の 水こそは 常にあらめ 御井の清水

### 原文

八隅知之 和期大王 高照 日之皇子 倉妙乃 藤井我原に 大御門 始賜而 埴安乃  
堤上に 在立之 見之賜者 日本乃 貴香具山者 日経乃 大御門に 春山跡 之美佐備  
立有 畝火乃此美豆山者 日緯能 大御門に 弥豆山跡 山佐備伊座 耳高之 貴管山者  
背友乃 大御門に 宣名倍 神佐備立有 名細 吉野乃山者 影友乃 大御門從 雲居に  
會 遠久有家留 高知也 天之御陰 天知也 日之御影乃 水許會婆 常に有米 御井之清水

持統藤原宮の「井」を詠っている。「井」とは「水汲み場で、泉・川・池など、清い水をたたえる所を広くいった。」（日本古典文学大系頭注） ここには、「貴香具山」「畝火」「耳成貴管山」が歌い込まれている。これらの山の名前は中大兄が歌った13番歌の「香具山（原文・高山）」「畝火（原文・雲根火）」「耳梨（原文・耳梨）」と大きく異なる。

### <日本乃貴香具山>

原文は、「日本乃貴香具山」である。ここにはその国名を、「日本」と明記している。「日本」とは奈良である。「貴香具山」と詠われている山は、「日本國の香具山」、つまり、奈良の香具山である。作歌者は「日本の」と、丁寧に奈良の山であることを明示している。そして、この歌をここに取り上げた万葉編纂者の意図も明らかである。

「藤井が原に大御門始め給へて」という歌詞の大御門は、日本（奈良）の地に建設された持統の宮の大御門である。九州から奈良に戻った持統は奈良で即位して、奈良に藤原宮を造営した。持統天皇が宮を新築したのは、太宰府ではなく、奈良である。持統天皇は奈良に遷って、そこ

に大御門を建設した。万葉編者はこの歌を収録することによって、近畿天皇家の始まりを明示したのである。



近畿天皇家の天の香具山

かつて、持統天皇は、「天の香具山」を歌った。

### 28 春過ぎて夏来るらし白桦の衣乾したり天の香具山

持統天皇が、かつて、詠った「天の香具山」とは香春に存在する三連山・香春一の岳である。三連山の一番北の山が「耳梨」である。文字通り、「耳」の形をした梨の姿である。中大兄の歌でも「耳梨」と正確に表されている。

( <http://ja.wikipedia.org/wiki/> )

### < 畝火の この瑞山は >

奈良の「畝火」の山が歌われている。しかしこの山の姿から「畝」は想像できない。おにぎりのような姿である。この山には本来は別の名前があったと思われる。では何故、この山は「畝火」という名で詠われたのか。

持統と共に、九州天皇家の人々が奈良に移ってきた。奈良藤原には北・東・西に三つの山があるのではないか。香春の三連山とは全く姿は異なるけれど、故国香春町の名山を倣んでこれらの山に同じような名前を付けたのではないだろうか。



近畿天皇家の畝傍山

( [ja.wikipedia.org/wiki/畝傍山](http://ja.wikipedia.org/wiki/畝傍山) )



## ＜耳高之青管山＞

「耳高」とは地名であろうか。この歌では山の名は「青管山」である。「管」は「笠」である。山の形状に由来する命名である。確かに北の「耳成」と呼ばれる山は「笠」を置いたように見える。ところが、九州香春の「耳梨」は「耳」の形をした「梨」に似ている。故に、「耳梨」なのである。

「耳」は同じだが名前の構成は全く異なる。奈良のこの山の呼び名の本質は「管（笠）」である。ところが、九州の「耳梨」という名前の本質は「梨」である。一方は「笠」で、他方は果物である。人々の山に抱くイメージは全く異なる。そして、「管山」の山の名前は姿を映している。日本國天皇家では元々この山は「管山（笠山）」と呼ばれていたのではないのでしょうか。



## ＜吉野の山＞

「吉野の山」も歌われている。

影面の 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける

奈良吉野は地理的に「明日香」の南である。この描写は地理に合致する。この「藤原京」を首都とした近畿天皇家にも「吉野の山」が存在した。しかし、この「吉野」の名前は本来の名前だったのであろうか。吉野とは、「葦の野」である。葦が群生しているから、「吉野」というのである。私たちがよく目にする「葦」は河口の岸边である。だが、奈良県吉野は吉野川の上流である。扇状地が広がる地勢ではない。私たちが吉野に車で行くと、吉野川のすぐ側の道を走る。だが、ここが「吉野（葦の野）」だという実感はない。

ところが、九州天皇家の吉野（小倉南区・竹馬川の河口）はまさに「葦の野」である。護岸がなければ今でも一面の葦野だったであろう。

## 持統伊勢行幸

持統6年（692年）3月6日、伊勢神宮へ行幸。この行幸について、万葉集は次の註を入れている。

右、日本紀に曰はく、朱鳥六年壬辰の春三月丙寅の朔の戊辰（5日）、浄廣肆廣瀬王等を以ちて留守の官となす。ここに中納言三輪朝臣高市麻呂、冠位を脱ぎて朝にささげ、重ねて諫めて曰はく、農作の前に車駕未だ以ちて動くべからず。辛未（6日）、天皇諫に従はず、遂に伊勢に幸す。五月乙丑の朔の庚午（6日）、阿胡の行宮に御すといへり。

持統は高市麻呂の冠を脱いでの決死の「諫」に従わず、伊勢行幸を強行した。なぜ、田植えで忙しい時期にあえて伊勢に行ったのか。伊勢の歌からはその真意は分からない。

#### 當麻真人麻呂の妻の作る歌

43 我が背子は いづく行くらむ 沖つ藻の 隠の山を 今日か越ゆらむ

#### 石上大臣の從駕にして作る歌

44 我妹子を いざ見の山を 高みかも 大和の見えぬ 国遠みかも  
（吾妹子乎 去来見乃山乎 高三香裳 日本能不見 國遠見可聞）

#### 大意

わが妻を、さあ見ようと、戻うそのいざみの山が高いからであろうか。國が遠いからであろうか。大和の國の見えないことよ。  
（日本古典文学大系頭注）



石上大臣の歌は、陸路で歌われている。この陸路は奈良から伊勢への街道である。「いざ見の山」は宇陀にある高見山といわれているが、伊勢街道に存在した山と思われる。

石上大臣の歌の原文は、「大和」ではなく、「日本能不見」である。「日本」という国名は関西に実在した日本國天皇家が使った国名である。

日本國天皇家は壬申の天武の乱において、太政大臣、大友王が倒されるまで日本列島を統治し

ていた覇者であった。持統が開いた近畿天皇家は、その国名を継承し、自国を、九州天皇家が使用した「倭（やまと）」ではなく、「日本」を使用した。石上大臣の歌の、「日本能无所見」は、その歴史に立って詠われている。

この持統伊勢行幸は、中納言三輪朝臣高市麻呂、冠位を脱ぎて「朝にささげ、」中止を進言したにもかかわらず3月6日強行された。そして5月6日に阿胡の行宮に着いた。約二ヶ月かけた旅だったが、新国家建設に奔走する持統にとってこの伊勢行幸は、果たさなければならぬ国家施策の一つだったと思われる。政府高官の職をかけての忠告にも耳を貸さず、伊勢に行った天皇持統には、近畿天皇家の国家宗教として新しく三重県伊勢に天照大神を祀るという使命があった。九州天皇家の伊勢（行橋市）に祀られていた天照大神を近畿天皇家の伊勢神宮（三重県伊勢）に遷居したのである。農繁期にもかかわらず、王朝挙げての伊勢行幸はそのためだったのである。

## 阿閉皇女・背の山の歌

紀伊國に幸しし時の川島皇子の御作歌

34 白波の濱松が枝の手向け草幾代までにか年の経ぬらむ

日本紀に曰はく、朱鳥四年の秋九月、天皇紀伊國に幸すといへり。

背の山を越ゆる時の阿閉皇女の御作歌

35 これやこの 倭にしては わが戀ふる 紀路にありとふ 名に負ふ背の山

阿閉皇女がこの歌を作った時は、川島皇子の歌と同じく、持統4年であろう。持統4年は持統が即位し、奈良における藤原宮時代の始まりの年である。阿閉皇女は草壁皇子の妃となり、文武天皇を生み、文武天皇が亡くなった後に即位する。養老5年（711）12月7日に61歳で亡くなった。阿閉皇女は661年に誕生、生まれた場所は不明である。丁度、その翌年662年に夫となる草壁皇子が近江大津宮（小倉南区）で生まれている。

阿閉皇女も九州天皇家で生まれた。そして、689年の持統奈良帰国までは、九州天皇家の京、大宰府で暮らしていた。

持統、阿閉皇女たちは大宰府から奈良、藤原京に移ってきた。藤原京は、「京と畿内」の首都である。「畿内」の南の堺が「紀伊の背の山」である。

「背の山」とは和歌山県伊都郡伊都町背ノ山（頭注）と云われる。では、何故、阿閉皇女はそれほど「背の山」を「恋いた」のであろうか。現在、この山は地元の人にはよく知られた山であるかもしれないが、全国的にはほとんど知られていない。紀ノ川の北岸に位置する高さ167mの低い山と言われる。

「名に負ふ背の山」とは「有名な背の山」という意味である。では何で有名だったのであろうか。それは大化二年（646）年の春正月の改新之詔である。大化改新の詔勅其の二で「京師」と「畿内國」に関する行政施策が実施された。

其の二に曰わく、……

凡そ畿内は、東は名墾（なばり）の横河より以来（このかた）、南は紀伊の兄山（せのやま）以来、西は赤石（あかし）の櫛淵（くしふち）より以来、北は近江の狭狭波（ささなみ）の合坂山（あうさかやま）以来を、畿内國とす。凡そ郡は四十里（よそさと）を以て大郡とせよ。三十里（みそさと）より以下、四里より以上を中郡（なかつこほり）とし、三里を小郡（すくなきこほり）とせよ。其の郡司には、並びに國造の性識清廉（ひととなりたまひしいいさぎよ）くして、時の務に堪える者を取りて、大領（こほりのみやつこ）少領（すけのみやつこ）とし、強くいさをしく聡敏（さと）くして、書算（てかきかずとる）に工（たくみ）なる者を、主政（まつりごとひと）・主帳（ふびと）とせよ。凡そ駅馬・傳馬給ふことは、皆鈴・傳符（つたへのしるし）の剋（きざみ）の數に依れ。凡そ諸國（くにぐに）及び關には、鈴契給す。並びに長官（かみ）執（と）れ。無くは次官執れ。



詔勅で畿内の東西南北の境界を定めた。

東は名墾（なばり）の横河  
西は赤石（あかし）の櫛淵（くしふち）  
南は紀伊の兄山（せのやま）  
北は近江の狭狭波（ささなみ）の合坂山

畿内國の南の境界が「背の山」であった。畿内とは日本國の直轄統治國である。この年、持統は畿内國の南の境界まで視察に廻ったのであろう。そして「背の山」まで行った。これが畿内の南の境界として大化の改新で定められたあの有名な背の山なのか。この感慨が歌となった。

## 紀伊行幸の歌

大宝元年秋九月、太上天皇の紀伊國に幸しし時の歌

54 巨勢山の つらつら椿 つらつらに 見つつ是はな 巨勢の春野を  
右一首、坂門人足  
55 あさもよし 紀人羨しも 亦打山 行き来と見らむ 紀人羨しも  
右一首、調首淡海  
56 河への つらつら椿 つらつらに 見れども飽かず 巨勢の春野は  
右一首、春日戴首老

題詞には、持統は太上天皇と書かれている。持統は持統11年（697）の譲位から、大宝2年（702）に亡くなるまでの間、太上天皇であった。この紀伊國は和歌山県である。「亦打山」は和歌山県橋本市真土と云われる。

## 奈良吉野の歌

太上天皇、吉野の宮に幸しし時、高市連黒人の作る歌

70 大和には 鳴きてか来らむ 呼子鳥 象の中山 呼びぞ越ゆる

持統が、大宝元年6月29日から7月10日まで、吉野の宮に行ったときの歌であるという。この吉野の宮は奈良吉野である。高市黒人は「吉野の宮」を歌っているのではない。高市黒人に、宮滝にあったと云われる吉野の宮に対して、何か格別な思いがあったようには読めない。また、この吉野の宮が何か歴史的な事件の舞台であったという感慨を持って詠ったようにも読めない。

通常「吉野」と言えば壬申の乱と結び付く。壬申の乱前夜、天武は「吉野宮」に立ち寄って、「吉野山」に登った。その「吉野宮」がこの「吉野宮」なのか。天武はここから「吉野山」に入ってしまったのか。・・・高市黒人はこのような感慨を持って詠ってはいない。天武の壬申の乱の舞台がこの吉野宮であれば、歌のどこかに感慨が入っていてもよさそうなものだが、ない。ないのは当然である。天武が登った吉野の山は九州企救半島の妙見山である。奈良吉野は天武と無関係である。高市黒人の歌に天武と壬申の乱に関する一言もないのは当然である。

黒人は「大和（奈良市）」を気にしている。「呼子鳥」が鳴いて、都の方へ飛んでいく。私の恋しい人が私を呼んでいるようだ。私も早く都へ帰りたい。奈良吉野の宮は寂しい。人が恋しい。

大行天皇、吉野の宮に幸しし時の歌

74 み吉野の 山のあらしの 寒けくに はたや今夜も 我が独り寝む

文武天皇が奈良吉野の宮に行ったときの歌である。大宝元年2月と大宝2年7月に行ったと、続日本紀にあるという。歌は個人的な感慨を歌っているだけで、格別のことはない。奈良吉野の宮



が存在したといわれる宮滝付近は今でも寂しい。山が迫り、川の音が聞こえるだけである。文武の寂寥感は当然であろう。

75 宇治間山 朝風寒し 旅にして 衣賃すべき 妹もあらなくに  
右一首、長屋王

## 九州天皇家吉野の追憶

第三巻に吉野の歌がある。作歌は土理宣令である。作歌時期は確定できないが、700年以降と思われる。

### 土理宣令の歌一首

313 み吉野の 瀧の白波 知らねども 語りし継げば 古戻ほゆ

私は、「吉野の瀧の白波」は知らないけれど、人々が語り継ぐので、古（いにしえ）が思われる。

土理宣令とは養老5年（721）従七位以下の時、東宮侍講となり、懐風藻・経国集に作品がある。故、漢学にすぐれていたらしいと、頭注は書いている。作歌時期は持統の690年、奈良に戻って以降の歌である。従って、この吉野は奈良吉野を歌ったと思われるがそうではない。

土理宣令は、今、奈良に生きている人である。彼は、奈良吉野へ行こうと思えば、行けないことはない。また、奈良吉野の川は、奈良王朝の人々が語り継ぐというほど、過去のものではない。現在も、持統天皇を始め、多くの人々が訪れている、現在進行形の場所である。奈良吉野は「古（いにしえ）」ではない。

土理宣令が歌った吉野は、九州天皇家の吉野である。現在は、近畿天皇家の代である。近畿天皇家の前の代とは、九州天皇家の代である。「古（いにしへ）」とは、過ぎ去った代、つまり、九州天皇家の代を意味する。

九州天皇家の吉野は、「瀧の白波」で有名であった。「瀧の白波」とは逆巻く波のことである。「逆巻く白波」とは川と海が織りなす特異な現象をいう。ただ単独の川の流れだけでは生じるものではない。また、川が海に流れ込むだけでも生じない。この現象は干潟があってはじめて生じる。干潟を川の水が流れていく。満潮時には、海水が干潟を遡る。川と海がぶつかる。川の流れが満潮とぶつかり逆巻く波となる。これが「瀧の白波」である。

九州天皇家の吉野宮は「瀧の白波」を生じる干潟に臨んでいた。小倉南区の曾根干潟である。持統天皇は太宰府から奈良に都（宮処）を遷した。だが、持統朝の九州天皇家の人々は吉野の白波の美しさを忘れてはいなかった。歌の席で、酒宴の席で何度も口にしたのであろう。当時の王朝人は皆、天武天皇家が九州に存在したことも、持統天皇が太宰府から奈良に遷ってきたことも当然知っていた。この事実は秘するような事実ではない。だから、歌にも詠まれたのである。

## 参河國の歌

持統天皇は、大宝2年10月から11月に参河國へ行幸している。この参河國は愛知県で、船旅だった。

### 二年壬寅、太上天皇の参河國に幸しし時の歌

57 引間野に にほふ榛原 入り乱れ 衣に ほはせ旅のしるしに  
右一首、長足才奥麿

58 いづくにか 船泊て すらむ安礼の崎 漕ぎ廻み行きし 棚無し小舟

右一首、高市連黒人

誉謝女王の作る歌

59 ながらふる 妻吹く風の 寒き夜に わが背の君は ひとりか寝らむ

長皇子の歌

60 暮に逢ひて 朝面無み 名張にか 日長く妹が 廬りせりけむ

舎人娘子の従駕にして作る歌

61 大丈夫の さつ矢手挟み 立ち向ひ 射る圓方は 見るにさやけし

いずれも旅の歌で特に興味をそそられる歌ではない。

## 大阪・難波宮の歌

慶雲三年丙午、難波の宮に幸しし時

志貴皇子の御作歌

64 葦辺行く 鴨の羽交ひに 霜降りて 寒き夕は 大和し思ほゆ

長皇子の御歌

65 霰打つ 安良礼松原 住吉の 弟日娘女と 見れど飽かぬかも

太上天皇、難波の宮に幸しし時の歌

66 大伴の 高師の浜の 松が根を 枕き寝れど 家し儼はゆ

右一首、置始東人

67 旅にして 物の恋ほしきに 鶴が音も 聞こえずありせば 恋ひて死なまし

右一首、高安大島

68 大伴の 御津の浜なる 忘れ貝 家なる妹を 忘れて思へや

右一首、身人部王

69 草枕 旅行く君と 知らませば 岸の埴生に にははさましを

右一首、清江娘子、長皇子に進る。

大行天皇、難波の宮に幸しし時の歌

71 大和恋ひ 寐の寝らえぬに 心なく この洲崎廻に 鶴鳴くべしや

右一首、忍坂部乙麿

72 玉藻刈る 沖へは漕がじ 数栲の 枕のあたり 忘れかねつも

右一首、式部卿藤原宇合

長皇子の御歌

73 我妹子を 早見浜風 大和なる 我を松椿 吹かざるなゆめ

慶雲三年、大阪城の近くに存在した難波の宮への持統行幸の時、志貴皇子、長皇子が歌った。64番歌は志貴皇子、65番歌は長皇子の作である。持統行幸は持統・志貴皇子・長皇子の3人である。この関係は何であろう。通常、志貴皇子は天智天皇の皇子と考えられることが多いが、持統と天武の皇子である長皇子の間に天智の皇子が割り込んできたとは考えられない。この3人

天武ファミリーと考えるべきである。志貴皇子と長皇子とは兄弟である。

# 元明天皇の代の歌

707年	文武天皇崩御。元明天皇即位。
708年(和銅元年)	和銅改元 右大臣正二位石上朝臣麻呂を左大臣に任じる。 三野連、山上憶良、唐へ派遣。
710年(和銅3年)	平城京遷都 左大臣正二位石上朝臣麻呂藤原京の留守司
712年(和銅5年)	長田王、伊勢へ
713年	風土記編纂
715年	譲位。元正天皇即位
721年	元明崩御

707年、文武天皇が亡くなり、元明天皇が即位する。元号は和銅である。新たな施策がとられるが、外交上では、近畿天皇家として、初めて、遣唐使を送ったことである。

## 近畿天皇家の遣唐使の歌

三野連唐に入る時、春日葺首老の作る歌

62 在り嶺よし 対馬の渡り 海中に幣取り 向けて早帰り来ね

山上憶良大唐にある時、本郷を憶ひて作る歌

63 いざ子ども 早く大和へ 大伴の御津の 浜松待ち 恋ひぬらむ

さあ、皆さん、早く日本へ帰ろう。大伴の御津の浜松が私たちの帰りを待ちこがれていることでしょう。

708年(和銅元年)に、三野連山上憶良が唐へ派遣された。近畿天皇家として初めての遣唐使である。それまでの遣唐使は日本國天皇家が派遣したものである。九州天皇家天武の皇后、持統は奈良に戻り、即位した。ここに近畿天皇家が始まる。このことを正式に唐皇帝に報告する遣唐使であった。山上憶良の歌の、「大和へ」は、原文では、「日本へ」である。持統の近畿天皇家は日本國天皇家の国号を引き継いでいた。

## 平城京遷都の歌

和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷りましし時に、御輿を長屋の原に停めて  
かに古郷を望みて作る歌

78 飛鳥の 明日香の里を 置きて去なば 君があたりは 見えずかもあらむ

藤原宮から奈良・寧楽宮への遷都を詠ったものである。藤原宮は藤原京と異なる。藤原京は持統が造営した京ではない。持統が奈良に遷都してきた時、すでに藤原京は存在した。持統が地鎮祭を行い、造営しようとした京は平城京である。この京は持統存命中には完成しなかった。この歌のように、元明の代に完成した。78番歌はその遷都を歌ったものである。住み慣れた「藤原宮」を離れて、さあ、平城京の「寧楽宮」に遷りましょう。

この望郷歌の前に二つの歌がある。

### 天皇の御製

76 ますらをの 鞆の音すなり もののふの 大臣 楯立つらしも

勇士が弓を射て鞆に弦の当たる音が聞こえてくる。将軍が楯を立てて訓練をしているらしい

### 御名部皇女の和へ奉る御歌

77 わご大君 物な思ほし 皇神の つぎて賜へる われ無けなくに

わが大王よ、心配なさいませぬ。皇祖神が大王に副えて生命を賜った私がおりますのですから

日本古典文学大系・萬葉集は、「もののふの大臣」と読んでいる。一般名詞で、軍事大臣といった意味である。原文は、「物部乃大臣」である。これは、「もののべの大臣」と読むべきではないか。物部氏は元明政権の第一権力者である。

701年 左大臣正二位 多治比真人嶋が死ぬ  
702年 正三位石上朝臣麻呂太宰率師  
704年 麻呂右大臣  
708年（和銅元） 従二位石上朝臣麻呂に正二位を授ける  
右大臣正二位石上朝臣麻呂を左大臣に任じる  
710年（和銅3） 平城京遷都  
左大臣正二位石上朝臣麻呂藤原京の留守司

元明政権の第一権力者は石上麻呂である。彼は物部氏である。故に、76番歌で「楯を立てている大臣」は石上麻呂を指していると思われる。従って、「物部乃大臣」は「もののべの大臣」と読むべきであろう。左大臣物部麻呂をさす。

元明天皇は、何か物思いにふけている。不安なのであろう。天皇は、何故、不安なのか。姉の御名部皇女が、「和へ奉る御歌」で、「物な思ほし（物莫御念）」と慰めている。「物」は「物部」をかけているように思える。物部氏の事は心配しなくてもいいですよ。このメッセージを込めているようである。

そして、遷都の歌が続く。和銅3年、平城遷都である。しかし、物部の石上麻呂は藤原京の留守司に任命されている。つまり、物部朝臣麻呂は新都平城京から外されて、飛鳥に残されたのであろう。日本書紀は石上朝臣麻呂が荒れているような書きぶりである。元明は左大臣石上朝臣麻呂に別れを告げる。

78 飛鳥の 明日香の里を 置きて去なば 君があたりは 見えずかもあらむ

飛ぶ鳥のように明日香の里を置いて飛び立ってきたが、左大臣、あなたの居るあたりはもう見えなくなってしまったわ。

### 長田王・三重伊勢の歌

和銅五年壬子の夏四月、長田王を伊勢の齋宮に遣はす時、山邊の御井にして作る歌

81 山の邊の 御井を見がても 神風の 伊勢少女ども 相見つるかも  
82 うらさぶる 情さまねし ひさかたの 天のしぐれの 流らふ見れば  
83 海の底 沖つ白波 立田山 何時か越えなむ 妹があたり見む



伊勢の齋宮は「三重県多気郡齋宮村の名を存す（頭注）」とあるように、多気郡に存在したと思われる。山邊の御井の存在場所は確定していない。

**山の辺の御井を見るついでに美しい伊勢の少女たちを見たことである。（頭注）**

81番歌の意味からすれば、御井を見た時に伊勢娘も見たと、歌うのであるから、御井も伊勢神宮に近い所にあったのであろう。伊勢神宮（内宮）は五十鈴川の畔にあるが、しかし、その場所は地図で見ると、「山の辺」である。長田王は、「山邊の御井」とともに、「伊勢少女」を見たという訳である。

## 寧楽宮

**長皇子、志貴皇子と佐紀宮に俱に宴する歌**

**84 秋さらば 今も見るごと 妻戀ひに 鹿鳴かむ山そ 高野原の上**

**今も鹿が見えるように、秋になったら、この高野原は妻を恋うて鹿が鳴く山となるでしょう。**

万葉集第一巻の最終を飾る歌である。和銅3年、元明天皇は、持統の藤原宮から平城京の新しい皇居、寧楽宮に遷った。691年、持統が地鎮祭を行ってから、約20年、やっと平城京が完成した。

長皇子、志貴皇子に二人が宴会した宮の名前は佐紀宮である。宮の名前から推定すると、この宮は奈良市佐紀町にあったと思われる。平城京完成によって近畿天皇家は京を構え、強力な統一中央集権国家となった。その輝かしい都の様子を思うと、長皇子の歌は地味である。

**妻を恋う鹿はやがて夫婦となり、子どもを生み育てることになる。壬申の乱に始まった政治の激動の時代は過ぎた。これからは人々が仲良く暮らしていく世となろう。**

万葉第一巻の最後を飾る歌としてふさわしい「寧・楽」の歌と云えるかもしれない。「寧」とは平和という意味である。作歌者は長皇子である。長皇子は天武の第四子と云われる。万葉編者は、万葉集第一巻の最後を飾る歌として、鹿が鳴く山の歌を載せたが、この歌自体に、特に深い意味をあるようには読めない。万葉編者がこの歌を最後の歌とした理由は歌ではなく、作歌者であったように思われる。近畿天皇家の代の中であって、長皇子は九州天皇家、天武の血筋を引く皇子である。万葉編者は九州天皇家天武の皇子、長皇子の歌によって万葉集第一巻を締めくくったのである。

しかし万葉編者は「元明の代」と天皇の代を掲げてはいない。万葉は持統の代で終わり、元明の代の歌は、ただ最後に「寧楽宮」と表示され、元明の代であることを示した。そして元明の歌ではなく天武の皇子である長皇子と志貴皇子が宴会をした時に読んだ長皇子の歌で万葉を閉じた。万葉編者にとって九州天皇家は長皇子・志貴皇子で終わるという考えであったのであろう。

万葉集第一巻は九州天皇家の「やまと」の歌で始まり、九州天皇家の最後の天皇、天武の第四子長皇子の歌で終わる。この終わりが象徴するように万葉集は歴史から消えていった九州天皇家の鎮魂歌集である。